

1 よりよい人間関係を築く力の育成を図る特別活動等の改善・充実

よりよい人間関係を築くために必要な社会的スキルを育成する活動の取組

滝川市立江陵中学校区

効果的な取組とするためのポイント

- ・ピア・サポートを取り入れた自殺予防教育プログラムの実施
- ・プログラムの実施後に小・中学校で合同研修会を実施

取組の実際

- ① 自殺予防教育プログラム（相談しやすい方法）の授業を公開（右写真）
 - ・加配教員が中心となり、ピア・サポートを取り入れた学習指導案を作成
 - ・中学校第1学年の授業を小学校の教員が参観し、入学後の生徒の様子を参観するとともに、今後の支援方策の具体や取組の成果・課題について協議
- ② 小・中学校合同の研修会（ピア・サポートについて）を実施
 - ・加配教員が中心となり、外部講師を選定し、研修会を企画・運営
 - ・ピア・サポートを各校の教育課程に位置付けて実践することの必要性について小・中合同で協議



成果（○）と課題（●）

- 自殺予防プログラム実施後の生徒の振り返りでは、「友人が悩んでいるときには、相談に乗りたいと思う」と肯定的に回答した生徒の割合が92%となった。
- 授業公開及び小・中学校合同研修会を実施したことにより、取組の必要性について共通理解が深まった。
- よりよい人間関係を築く力の系統的な育成に向けて、ピア・サポートを小学校の教育課程に位置付けた実践とするよう検討していく必要がある。

「ほっと」又は生活アンケートの実施、分析及び校内研修や学年会議等での活用

江別市立江別第二中学校区

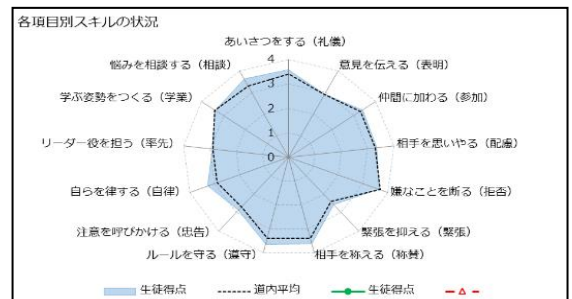
効果的な取組とするためのポイント

子ども理解支援ツール「ほっと」を年2回実施し、結果の分析によって明らかになった課題を全教職員で共有し、学年経営及び学級経営、教育相談等における指導の工夫改善に生かすとともに、中1ギャップ検討委員会で各校の実態を交流し、児童生徒理解の充実を図った。

取組の実際

小・中学校において、同じ時期に「ほっと」を実施した。相談体制の充実に向けて、加配教員や生徒指導担当教員が結果を分析し、効果的な教育相談の方法について、小・中学校の全教職員で共通理解を図った。

「ほっと」の結果を基に、学年経営及び学級経営を見直したり、授業改善を推進したりしたことにより、2回目の「ほっと」において、「相談」や「自律」などの数値が増加した。（右上図は第1学年の結果）



成果（○）と課題（●）

- 小・中学校において「ほっと」の分析結果を共有したことにより、児童生徒理解が深まるとともに、きめ細かな指導や支援の在り方について共通理解を図ることができた。
- 学校間や学級間において、「ほっと」の数値に差が見られるため、「ほっと」の実施から分析までを迅速に行う体制を整備するとともに、具体的な「ほっと」の活用方法を明確に示す必要がある。

「ほっと」又は生活アンケートの実施、分析及び校内研修や学年会議等での活用 小樽市立北陵中学校区

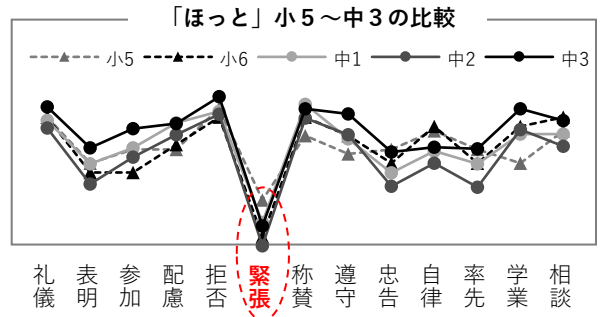
効果的な取組とするためのポイント

- ・「ほっと」の分析と生活アンケートの関連項目とを結び付け、どのような力を伸ばすかを明確にすること
- ・校内研修による授業改善とともに小中一貫の取組を充実させること

取組の実際

校区3校で7月に「ほっと」を実施し、加配教員を中心に分析すると「緊張」の得点が最も低かった。生活アンケートの「自分の考えを表現できる」の肯定的回答が67.5%だった。そこで「**表現力**」に焦点を当てた以下の取組を行った。

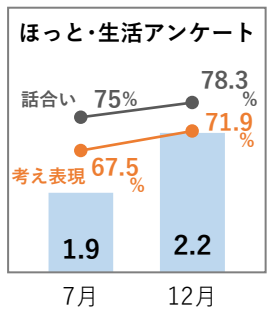
- ①小・中学校で「**対話的な学び**」の視点による授業改善
- ②小学校2校の**第5・6学年**での「**合同授業**」



成果 (○) と課題 (●)

○ 小学校2校の第5・6学年を混合で学級編成し、中学校教員が授業する「合同授業」を実施し、グループ学習等を充実させたことにより、12月の「ほっと」では「緊張」の得点が1.9ポイントから2.2ポイントへ増加した。また、生活アンケートでは、「話合いに積極的に参加」「自分の考えを表現」で肯定的回答の割合が増加した。

● 教員数の減少が予想されるため、より組織的な対応を行っていく必要がある。



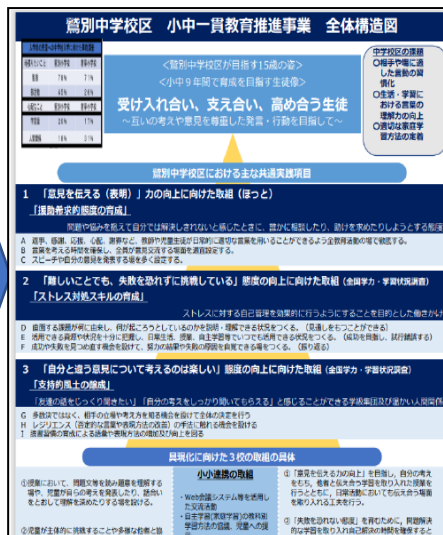
「ほっと」又は生活アンケートの実施、分析及び校内研修や学年会議等での活用 登別市立鷺別中学校区

効果的な取組とするためのポイント

中学校区における児童生徒の課題を客観的な数値評価で捉えるため、全国学力・学習状況調査の児童生徒質問紙と「ほっと」を活用し、過年度との比較により課題が見られた3つの項目を重点として取り上げ、日常生活指導、学習指導の場面で意識して取り組んでいる。

取組の実際

「意見を伝える力」(ほっと)「難しいことでも失敗を恐れずに挑戦する態度」(質問紙)「自分と違う意見について考えることは楽しいと捉える態度」(質問紙)の向上に向けた取組を全体構造図で可視化し、加配教員が中学校区の全教職員に説明、周知した。



成果 (○) と課題 (●)

○ 中学校区で目指す15歳の姿及び重点項目を可視化し、各校が策定した具体的な取組を継続して実践したことにより、焦点を絞り、組織的な取組とすることができた。

● 中学校区の教員が、実践したことによる児童生徒の変容について意見交流する機会が少ないため、情報共有の場を設定し、取組を充実させる必要がある。

学級活動等の合同実施による児童生徒の交流など、小・中学校が連携した取組 様似町立様似中学校区

効果的な取組とするためのポイント

小学校第6学年児童が、中学校の「全校総合学習発表会」に参加し、互いに学習の成果を発表し合うことで、総合的な学習の時間の今後の見通しをもったり、質疑応答を通して交流したりする機会とし、中学校進学後の不安感の緩和につなげた。

取組の実際

小・中学校が合同で行う、ふるさと教育の発表会として、中学校の「全校総合学習発表会」に小学校第6学年児童が参加した（右写真）。**事前に、小・中学校の全教職員が系統性を意識して指導できるよう、加配教員を中心に研修会**を行った。



また、中学校第3学年の生徒が、小学校第6学年の児童に、発表内容や発表方法を事前に説明することで、児童が発表内容及び発表方法に自信をもち、「全校総合学習発表会」に参加することができるよう学習計画を立てた。

当日は、小学校第6学年の児童と中学校の全生徒が、学習成果について発表し合うとともに、質疑応答の場面で、苦労した点について交流を行った。

成果（○）と課題（●）

- 小学校第6学年の児童が、中学校の「全校総合学習発表会」に参加したことにより、「中学生の発表を見て、調べ学習のまとめ方が分かった」「中学生が優しく教えてくれて、うれしかった」などの感想が聞かれ、児童の中学校進学後の不安感の緩和に繋がった。
- 中学生が児童への発表方法を説明した際、児童が初めて知る内容であったため、戸惑う様子が見られたことから、ふるさと教育の成果物の様式や発表の方法を統一するなどして、児童が不安なく発表できるよう、加配教員を中心に、小中学校の全教職員が共通理解を図る必要がある。

「ほっと」又は生活アンケートの実施、分析及び校内研修や学年会議等での活用 函館市立巴中学校区

効果的な取組とするためのポイント

子ども理解支援ツール「ほっと」の結果について、推進地域全体による分析及び交流を通して、児童生徒の実態把握に努めるとともに、進級及び進学の際の引継ぎ資料として、年度始めの児童生徒理解の促進や学級編成等への活用を図る。

取組の実際

子ども理解支援ツール「ほっと」を、各学校において2回実施するとともに、**結果を分析し、児童生徒のよりよい人間関係の形成等に向けて活用**した。

中学校1年の結果	関係維持	仲間強化	自己統制	平均
1回目（7月集計）	50.1	51.0	53.4	51.5
2回目（12月集計）	50.9	50.2	52.8	51.3

成果（○）と課題（●）

- 子ども理解支援ツール「ほっと」、生活アンケート及びいじめ調査の結果の分析や、教育相談などで得られた情報の共有を図ったことにより、推進地域全体で児童生徒理解を推進することができた。
- 調査内容の詳細な分析を行うため、推進地域全体で協議する機会を増やし、全ての教職員の共通理解を図る必要がある。

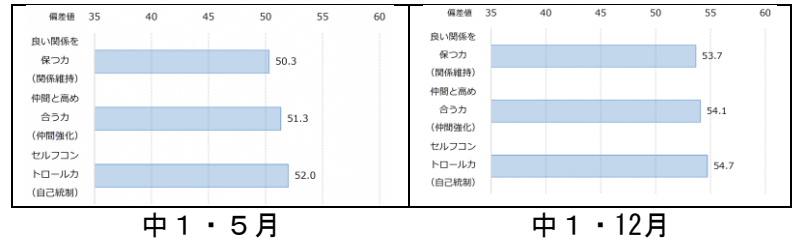
「ほっと」又は生活アンケートの実施、分析及び校内研修や学年会議等での活用 厚沢部町立厚沢部中学校区

効果的な取組とするためのポイント

- ・ ソーシャル・スキル・トレーニングの手法を取り入れた総合的な学習の時間や道徳科の授業の実施
- ・ 教職員間での「自己効力感」の育成、「スルースキル」の育成に関する共通認識と積極的な研修の実施

取組の実際

- ・ 異学年での合同授業等の実施
- ・ **ソーシャル・スキル・トレーニングの手法を取り入れた授業の実施**
- ・ 外部講師を招へいた授業の実施
- ・ 加配教員が分析した「ほっと」結果（右図）の教職員間情報交流



成果（○）と課題（●）

- 教職員で分析結果を交流し、人間関係を築く力の育成に共通した視点で取り組んだことにより、ソーシャルスキル尺度の数値が向上し、よりよい人間関係を築く力が育成できた。
- 全体的によい結果に改善されたが、今後は個々の生徒に着目した細かなケアを行う必要がある。

「ほっと」又は生活アンケートの実施、分析及び校内研修や学年会議等での活用 旭川市立光陽中学校区

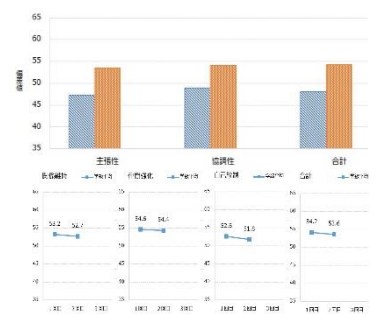
効果的な取組とするためのポイント

推進地域3校の小・中学校で、子ども理解支援ツール「ほっと」を活用し、各学校で結果の分析と課題の明確化を行った。さらに、推進地域全体の分析を行い、その傾向と特徴を捉え、共通理解をすることで、中1ギャップ問題の未然防止に向けた取組の充実につなげた。

取組の実際

○ 子ども理解支援ツール「ほっと」の活用

子ども理解支援ツール「ほっと」を前期・後期2回実施し、加配教員を中心に、コミュニケーションスキルの各項目についての分析を行った（右図）。学級や個々の児童生徒の状況を的確に把握し、「**児童生徒のよさ**」や「**課題**」の**焦点化**を図った。注目すべき点は、「礼儀」と「緊張」の2項目が3校とも上昇していることである。挨拶や感謝の気持ちなどの豊かな心や、緊張や不安がある場面でも失敗を恐れず、自信をもって活動するスキルを高めることができた。また、小学校では、主張性・協調性の両因子で大幅な上昇が見られた。これらの分析結果は、各学校で校内研修等を利用し、全教員が情報共有することにより、**授業改善や教科経営、学級経営に活用**した。



成果（○）と課題（●）

- 推進地区3校の「ほっと」の分析結果を共有したことにより、学年・学級集団の傾向を把握することができ、きめ細かな指導や支援方法について共通理解を図るなど、児童生徒理解が深まった。
- 小学校では、1回目の分析結果をP D C Aサイクルに基づいた教育活動の実践に生かしたことにより、児童のコミュニケーションスキルの向上につなげることができた。
- 中学校では、全ての因子でポイントが下降した。コミュニケーションスキル13要素の分析結果を学年・学級経営に生かしきれていないため、今後はP D C Aサイクルに基づく効果的な実践を推進する必要がある。

学校行事等の合同実施による児童生徒の交流など、小・中学校が連携した取組

鷹栖町立鷹栖中学校区

効果的な取組とするためのポイント

- ・児童会・生徒会の役員を中心に、「いじめ撲滅運動」に取り組むことを通して、児童生徒の交流を図った。
- ・学校行事を通して、小学校第6学年の児童と中学校第1学年の生徒の交流場面を設定することにより、中学校入学への不安解消を図った。

取組の実際

1 「いじめ撲滅キーワード」作成を通じた児童会・生徒会交流

児童会・生徒会の役員が集まり、中学生の進行により、今年度の各校の児童会・生徒会の取組について、パワーポイントを活用しながら交流した（右写真）。

次年度以降、小・中学校が共通の合言葉の下、「いじめ撲滅運動」を推進することができるよう、推進地域の全児童生徒からキャッチフレーズを募集し、児童会・生徒会の児童生徒が中心となり、いじめ撲滅キーワード作成に向けた取組を進めている。



2 小学校第6学年の児童と中学校第1学年生徒の交流

新入生体験入学において、児童生徒同士の交流時間を設け、中学校入学に対する不安解消を図った。

成果（○）と課題（●）

- 小・中学校の交流を進めたことにより、児童生徒のみならず、教員同士の交流を深めることができた。
- 一過性の取組にならないように、今年度の取組を見直し、次年度以降も継続していく必要がある。

「ほっと」又は生活アンケートの実施、分析及び校内研修や学年会議等での活用

羽幌町立羽幌中学校区

効果的な取組とするためのポイント

年3回のQ-U、「ほっと」の実施を軸に組織的な生徒指導の検証改善サイクルを確立することにより、個に応じたきめ細やかな指導をとおした児童生徒のよりよい人間関係を築く力の育成を図る。

取組の実際

加配教員を中心に、各学級のQ-U、「ほっと」の結果を分析し、全体研修で検証（右写真）

学級・教科での全教職員による児童生徒へのアプローチ

学級経営・教科指導の改善プランの策定



5月・9月・12月のQ-U・ほっと検査を軸に、アプローチの検証改善サイクルを実施

- ・12月の学校評価アンケート（教職員）ではQ-Uや「ほっと」を活用し、生徒一人一人に応じた積極的な生徒指導を推進している」の項目に9割の教職員が肯定的な評価をしている。
- ・12月の学校評価アンケート（生徒）では「先生方は頑張っているところを認めてくれる」の項目に86%の生徒が肯定的な評価をしている。

成果（○）と課題（●）

- 検査を軸とした生徒指導の検証改善サイクルを確立したことにより、組織的できめ細やかな生徒指導につなげることができた。
- 検査の分析に時間を要することから、分析のポイントを絞るなどより効率的に取組を推進する必要がある。

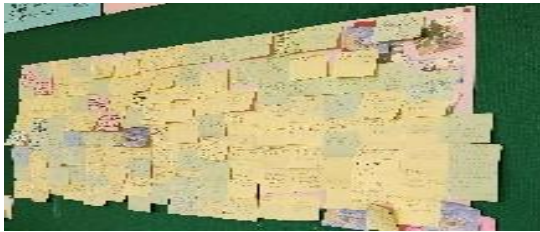
よりよい人間関係を築くために必要な社会的スキルを育成する活動

枝幸町立枝幸中学校区

効果的な取組とするためのポイント

児童生徒間で互いの頑張りやよさを発見し伝え合う活動を通して、自己肯定感・自己有用感を高めるとともに、他者のよさを見付け・見つめ、よりよい人間関係を築く。

取組の実際



中1ギャップ問題未然防止事業検討委員会において、加配教員を中心に協議を行い、子ども理解支援ツール「ほっと」の分析の結果、「表明」のスキルに課題が見られたことから、児童生徒が自己肯定感・自己有用感を高め、安心して自己の考えを表明できるようにするために、学級活動の時間に、互いに発見した他者の頑張りやよさを、黒板に掲示し、認め合う活動を実施した。(左写真)

成果(○)と課題(●)

- 自己肯定感・自己有用感が高まり、児童生徒の「表明」スキルの向上が図られた。
- 「表明」するスキルをさらに高めるため、互いの頑張りやよさを認め合う活動の定期的な実施や小学校間または、小・中学校間で実施するなど、工夫を図る必要がある。

「ほっと」又は生活アンケートの実施、分析及び校内研修や学年会議等での活用

遠軽町立遠軽中学校区

効果的な取組とするためのポイント

推進地域の3つの小・中学校で実施した子ども理解支援ツール「ほっと」の結果を、中1ギャップ担当者会議で分析を行い、推進地域の児童生徒の課題を明確にした。その後、各校において児童生徒の社会的スキル及びコミュニケーション能力の向上を図るための校内研修を行い、授業実践や評価結果について、再度、中1ギャップ担当者会議において交流した。

取組の実際

子ども理解支援ツール「ほっと」の実施と分析

コミュニケーションスキルの項目において、「表明」「緊張」「忠告」の値が共通して低い(右上図)ことから、自分の考えを安心して伝えられる雰囲気づくりを行うことを重点とし、各校において研修を行い、児童生徒への支援の充実を図った。

	表明	緊張	忠告
小6	2.9	2.4	3.0
中1	2.9	2.3	2.9
中2	2.8	2.5	2.6
中3	3.1	2.4	2.9

成果(○)と課題(●)

- 推進地域で子ども理解支援ツール「ほっと」の分析結果を共有し、児童生徒の実態に合った課題を明確にしたことにより、学習規律の刷新(右下図)等、各校の状況に応じた取組を推進することができた。
- 児童生徒に身に付けさせたい社会的スキルは多様であることから、より効果的な取組についての検討・改善を図り、意図的・計画的に実践する必要がある。

自分で	遠中スタンダード	整え
家に帰ったら ・1日1時間以上の家庭学習をする ・提出物を出せるように準備する		休み時間に ・授業の準備をしっかりとする ・忘れ物は教科担任に申し出る
前向き 授業中に ・私語を慎み、集中する ・質問や意見を積極的に言う		切り換え 授業の前後に ・チャイム前には着席する ・先着後着でピシッと挨拶する

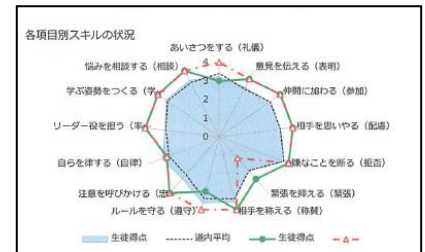
「ほっと」又は生活アンケートの実施、分析及び校内研修や学年会議等での活用 芽室町立芽室中学校区

効果的な取組とするためのポイント

アセスメントツールを年間複数回実施することにより、児童生徒の変容を見取るとともに、定期的に児童生徒の様子について、客観的数値を基に把握する機会を多く設定した。

取組の実際

- 年2回（7月と12月）、子ども理解支援ツール「ほっと」を実施し、人間関係に係るクラスの状態や実態を把握（右図）するとともに、変容を経年変化で見取った。加配教諭と各学級担任が「ほっと」の結果を共有し、指導方法の改善に向けて検討した。



また、「ほっと」の実施に係る学習会を実施し、「ほっと」の分析方法や活用の仕方について、中学校区の教職員の理解を深めた。

- 「ほっと」以外に、年に2回のhyper-QUの実施や年3回の「心と身体のチェック」の実施等、複数のアセスメントツールを実施した。アセスメントツールを組み合わせることで、多角的な児童生徒理解を図り、人間関係を中心とした学級経営の改善・充実に資するよう努めた。

成果（○）と課題（●）

- 「ほっと」などのアセスメントツールを活用したことにより、客観的な数値を基にした指導指針を設定し、教職員で共有することができた。
- 児童生徒の変容を適切に見取るため、アセスメントツールを精選する必要がある。

「ほっと」又は生活アンケートの実施、分析及び校内研修や学年会議等での活用 厚岸町立太田中学校区

効果的な取組とするためのポイント

小・中学校で実施した子ども理解支援ツール「ほっと」の結果を、中1ギャップ未然防止委員会において分析するとともに、校内研修等で全教職員に周知・共有を図った。

取組の実際

子ども理解支援ツール「ほっと」を小・中学校それぞれ2回ずつ実施し、加配教員を中心に、調査結果を中1ギャップ検討委員会で比較・分析し、校内研修を通じて、全教員に共有した。調査結果を児童生徒個人の課題としてだけでなく、中学校区全体の課題として捉え、生徒が主体的に企画し運営する「全校交流」（右写真）や学校行事における生徒会企画の内容の改善充実につなげた。



成果（○）と課題（●）

- 小・中学校全ての児童生徒を対象に調査を行い、分析したことにより、中学校区の課題把握につながった。
- 取組の検証改善のため、今後も継続して経年変化を見取り、分析していく必要がある。

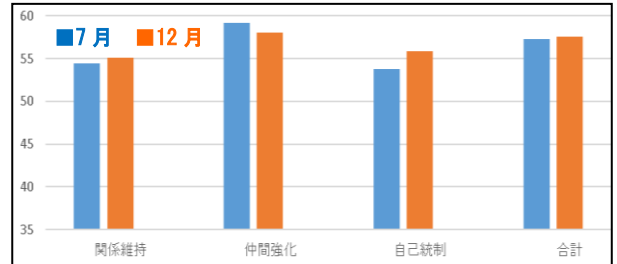
「ほっと」又は生活アンケートの実施、分析及び校内研修や学年会議等での活用 根室市立柏陵中学校区

効果的な取組とするためのポイント

「ほっと」の結果を中学校区で交流し、小・中学校共通した重点として特別活動や各教科で、学年単位や縦割りなど、主体的・対話的な活動を取り入れ、人間関係を築く力が育成を図る場面を意図的に設定する。

取組の実際

小中学校合同研修会において、「ほっと」(右図、中1結果)について研修する機会を設け、課題を明らかにし、学校行事では、児童生徒が主体的に活動し、**リーダー役やフォロワー役としての役割の自覚を促す機会**を意図的に設け、指導に当たった。



成果(○)と課題(●)

- 文化祭等の学校行事で異学年集団の活動を意図的に取り入れたことにより、「ほっと」の結果では他者と良好な関係を保ち、励まし合う力である「関係維持」が1回目を上回った。
- 「仲間強化」に課題が見られるため、特別活動に限らず道徳教育の充実を図る必要がある。